

セッション9

精神科看護に活かす家族療法を考える

加茂 陽¹⁾、執行良子²⁾、神成成子²⁾、美王真紀³⁾

1) 県立広島大学保健福祉学部、2) 社団法人更生会草津病院、3) 医療法人佑心会堀江病院

【はじめに】

精神疾患を持つ患者の家族は、その疾患の特性から、誰にも相談できず、家族だけで気持ちを抱え込んでしまうことが多い。患者が入院するときは症状が最も顕著に現れている時期でもあるため、家族は一安心し、疲弊した心身を休ませることが出来るであろう。しかし同時に、家族の成員にはこの先どうしたらいいのか、どう患者と接すればいいのかなどといった心配や不安が常に頭にあるのではないかと思われる。この心配や不安を持ちながらも、なんとか患者と共にやっという気持ちを持ち、病棟へ足を運んでいるのであろう。この事態において、私たち看護師が行う有効な家族と患者へのケアはいかなるものであるだろうか。

今回、患者を持つ家族に面接をする機会があり、その経過を要約した。それまで私たちは、面会に来ている家族の話聞き、受容・共感するものの、それが本当に家族の力になれているのかという疑問を持ち続けていた。面接中の受容・共感が重要であることは実感しつつも、具体的な問題の解決を試みる実践方法については手探りの状態であった。面接を吟味する中で、単なる受容に留まらない新たな家族への看護ケアの必要性を実感した。すなわち、家族への看護ケアにおいて、具体的な問題解決という次の一步を踏み出すことが課題であると痛感された。そのような試行錯誤のとき、家族看護研究会で、問題解決を強く思考する解決志向短期家族療法 SFBPT (Solution Focused Brief Psychotherapy) に出会い、その問題解決力に強い印象を受けた。

精神科看護師やその他の医療現場で働く看護師の方々の看護実践へこの療法が貢献することを願って、今回はテーマセッションを組んだ。この最新の家族療法が看護の臨床現場において貢献することを願って、皆様と議論を深めていきたいと考えている。

【テーマセッションの構成】

このセッションは前半部分と後半部分から構成される。

1. 前半のセッション

- ①講義編：SFBPT 実践の基礎である「クライアントの問題定義」とそれを解決可能な形に変容する理論と技法に関して説明を試みる。そして、その手法を持つてすれば、クライアントの巨大な「問題定義」が解決可能な形へと「最小化」されることを明らかにする。
- ②実践編：ケース事例を取り上げ、ロールプレイの形でこれらの技法の使用法の実際を示す。
- ③質疑応答：理論、及び技法使用に関して質疑応答を行う。

2. 後半のセッション

- ①講義編：「最小化」された問題を変容させる一連の技法とその使用法について説明を行う。
- ②実践編：前半のセッションでの事例を用い、技法を使用しつつ如何に問題を変化させるのかを、同じくロールプレイの形で明らかにする。
- ③質疑応答：理論と技法使用についての議論を行う。